

# 文学館だより

令和 4年10月 1日  
若山牧水記念文学館  
TEL 0982 - 68 - 9511  
文 責 日 高

台風 14 号、15 号に遭われた皆さま、お見舞い申し上げます。  
県内の被害が全国ニュースで報道され、あちらこちらからお電話をいただきました。  
幸いにして生家、文学館とも建物被害はなく、木々の枝折れ程度で済みました。  
日常に戻るには多くの日数を要する方々を思うと、胸が痛みます。

## 第72回 牧水祭歌碑祭を開催しました



牧水と喜志子の夫婦歌碑



那須文美会長による献酒

「3年ぶりにお客さまをお迎えした牧水祭が開催できそうです。」  
とご案内したばかりでしたのに・・・

牧水をこよなく愛し、牧水の歌を書いたためこられた仮名書道家 榎倉香邨先生のご逝去を悼み、牧水と榎倉先生を偲ぶ内容で、今年の牧水祭は計画を進めてきました。しかしながら、あの大きな被害をもたらした台風 14 号の接近により当日は荒天が予想されたので、参加者の安全を優先し「牧水を偲ぶ会」は中止、規模を縮小して主催者のみで「歌碑祭」を行うことといたしました。牧水と榎倉先生を偲ぶ会については、改めて開催いたします。ご案内できる日をしばらくお待ちいただきたいと思います。

今年も主催者のみの歌碑祭とはなりましたが、72年間、一度も途絶えたことがないという歌碑祭を無事、来年に繋ぐことができました。コロナや台風が道を塞ごうとも、牧水先生を思う気持ちはひとつでした。早朝より顕彰会理事の皆さんが駆けつけ、カップを着ての準備には頭が下がりました。

## 10月企画展のごあんない

三浦家寄贈資料公開展総括 10月5日(水)～11月27日(日)

令和3年度通年開催した『三浦家寄贈資料公開展 繁と敏夫—受け継がれた二人の絆(1期～3期)』を総括して、ここに再び皆さまに観ていただく機会を設けました。

創作社友であった三浦敏夫と牧水が出会い、二人は次第に親交を深めていく。牧水亡き後も若山家とのつながりは途絶えることなく続く。その絆の深さを物語る手紙や牧水遺墨の数々。391点にも及ぶ資料が三浦家から寄贈された。ここ文学館でしか観ることができない貴重な品々が並ぶ。



三浦敏夫

明治 25 年、愛媛県岩城島に生まれる。創作社友として短歌を詠む一方、俳句も相当数作っている。牧水を経済的にも支え、牧水没後は喜志子や若山家との親交を深めた。晩年、自宅に念願の牧水歌碑を建立。自らを「島の歌碑守」と称し、昭和 41 年、74 歳で没するまで牧水を敬愛し、歌作に励んだ。  
『島の歌碑守』参照

### 見どころ1 赤裸々集

牧水から敏夫宛に送られてきた手紙を時系列に貼り合わせたもの。三巻からなり長さ10メートルにも及ぶ。  
今回、原寸大複製を作成。

### 見どころ2 百首歌鈔

牧水直筆の歌 100 首本。牧水直筆 100 首が敏夫に送られ、後に敏夫の手によって製本されたものと思われる。複製本は手に取ってご覧いただける。

### 見どころ3 寥々抄

喜志子直筆の歌 100 首本。牧水の「百首歌鈔」同様、敏夫が製本を手がけていると思われる。「百首歌鈔」とともに 2 冊とない大変貴重なものである。

前回見逃したという方はぜひご来観ください。  
一度ご覧になられた方も、もう一度お出かけなさいませんか。必見です。

新規収蔵遺墨展2 9月4日～11月27日(日)

昨年度新たに収蔵した牧水遺墨を第1展示室にて展示しています。

## ご紹介 『若山牧水展』

|   |  |
|---|--|
| <b>特別展 「若山牧水」 ～牧水と旅～</b>                            | <b>若山牧水展 — 115年の時をこえて —</b>                        |
| 会場 宮崎県立図書館 特別展示室<br>期間 ～ 10月16日(日)                  | 会場 原田文学館<br>期間 ～ 10月26日(水)                         |
| 問い合わせ先 宮崎県立図書館<br>0985 - 29 - 2954                  | 問い合わせ先 原田文学館<br>岡山県浅口市鴨方町六条院中<br>080 - 1939 - 0939 |
| 旅について考えることはそのまま<br>人生そのものについて考えること<br>になりませんか。 伊藤一彦 | 牧水が岡山を最初に訪れてから今年で115年。<br>牧水文学の魅力に触れていただけたら幸いです。   |

新しい牧水発見にお出かけになりませんか。  
詳細は、それぞれにお問い合わせください。

とき

## 『牧水と時代を紡いだ百人』展 文学館へ寄贈



文学館玄関前にて  
右 甲斐猛義さん

覚えていらっしゃる方も多いことでしょう。ちょうど1年前になります。令和3年10月1日から年末までギャラリー企画『牧水と時間(とき)を紡いだ百人』展を開催いたしました。牧水と時代を同じく活躍した文化人100人のデッサン画展でした。4度の移動展を重ね、1年後にまた文学館に戻ってきました。今回は、手に取って観ていただけるように1枚1枚をファイリングしてお届けいただきました(写真左)。百人展が新しい形で蘇りました。

作者の甲斐猛義さん(宮崎市在住)が9月29日(木)文学館を来訪され、作品をご寄贈くださいました。

作品は、文学館ラウンジでいつでもご覧いただけます。



昨年の展示風景

## 牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

さか

### をち方に離りある友をおもふ時かがやく珠をおもひこそすれ

大正11年年末に詠まれ、「友をおもふ歌」と題して11首が並んでいる。どの歌にも人間牧水が素直に現れている。この頃の歌に「命を惜しむ歌」15首があり、体調が悪く節酒をしようとしたり、冷水摩擦やかけ足をするなど健康に注意する牧水がいる。

「友をおもふ歌」より  
知れる人みななつかしくなりきたるこのたまゆらのかなしかりけり  
何事のあるとなけれど逢はざればこころはかわく逢はざらめやも  
逢ひてただ微笑(ほほゑ) みかはしうなづかば足りむ逢(あひ)なり逢はざらめやも

先月、東京在住の方から問い合わせがあった1首です。  
単語を調べたり時代背景を調べたりしながら、この頃の牧水を想像しました。

をち方・・・遠く離れた方      離(さか)る・・・離れる      珠・・・美しい石、宝石、真珠

散歩するコースと距離は日々変える一首浮かべば牧水になる

朝日新聞みやざき版短歌投稿 9月26日掲載